The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	庭の発生的現象学 ： 土地をめぐる実践知の学の試論
Author(s)	今江, 秀史
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67088
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　今江秀史　）	
論文題名	庭の発生的現象学:土地をめぐる実践知の学の試論

論文内容の要旨

旧来の土地に関する諸科学では、各分野において個別の指標を立て用語が定義されてきた。その結果、特定の同じ土地が対象とされていながら分野間で相互理解を図ることができず、学際研究に支障を来してきた。それは土地に関する諸科学の根拠付けが曖昧で、統一性に欠ける状態にあることを意味する。根拠付けが不統合な諸科学は、その存続において危機状態にある。近代科学的手法が西洋より取り入れられた本邦において、それは、現象学の提唱者であるエドムント・フッサールが指摘した「ヨーロッパ諸学の危機」の延長線上の課題であり克服が求められる。さらに庭園学および造園学、建築学など土地に関する諸科学は、実学と称されながら、日常の生活世界における実践そのものを記述できないという矛盾を抱えてきた。それらの科学では、それぞれの研究対象について外的に観察した事柄を説明あるいは批評するだけで、内的な直接経験を通じた実践そのものの記述、さらには多様な実践的行為の本質的意味が解明されることはなかった。

諸科学が日常の実践において厳密性と信頼性を得る研究を行っていくためには、前述の危機と矛盾へ正面から向き合い、その抜本的な克服をする必要がある。そこで本論は、フッサールとモーリス・メルロ=ポンティらによる現象学に依拠し、「庭」を補助線として土地に関する諸科学の根本問題を浮き彫りし、先経験的な位相にある「原的信憑」から日常の生活世界の実践にともなう「信憑」の解明のあり方を導出する。そして、そのあり方に則って日常の生活世界の「庭」に関する実践の多角的な記述を試みるものである。

本論の構成は、日常の生活世界の土地に関する記述の前提および方法の検討と、その方法に即した伝統的に継承されてきた実在の庭についての試論の２部からなる。

第１部第１章では、旧来の土地に関する諸科学の根本問題を先行研究に基づいて浮き彫りにする。科学のなかで土地を題材とする分野としては、建築学、考古学、地理学、庭園学（造園学）、歴史学などがある。これら諸科学において同一の土地が対象とされた場合、各分野において建物、埋蔵文化財、地理、庭園、歴史について書き分けられているのであれば、それらの記述の総和が特定の土地の詳述となるはずである。そこで京都府京都市中京区に実在する壬生寺という寺院を対象とした前掲の科学分野の記述を掲出して一括したところ、諸科学の記述の前提と方法が不揃いであるため、それらの記述の総和が特定の土地の全容を意味しないことが明らかとなった。この結果は、諸科学が日常の生活世界における同一の土地を対象としながら､それぞれ異なる前提と方法に立脚することによって、性質の違う記述の結果を招いてきたことを示す。

次に造園学原論を事例として、特定の科学における前提と方法について分析したところ、諸科学では他の科学との差別化が意識され、独自の理想を前提した記述方法が構築されていた。諸科学が個別の価値観による前提と方法に即すことによって、本来単一である日常の生活世界の土地は、多元的に記述されてきた。つまり諸科学の記述は、恣意によって生活世界の土地の実態とか乖離させられてきたことを意味する。それこそが土地に関する諸科学の根本問題である。

フランスの地理学者・オギュスタン・ベルクは、文化を自然で説明しようとする自然科学における二元論への批判を通じて、単元的な土地の次元を指し示す「風土の理論」を提唱した。その理論の構築にあたってベルクが、和辻哲郎やマルティン・ハイデガーの哲学に依拠したことは、日常の生活世界の土地の記述のあり方を検討するうえで重要な示唆となる。しかしながらベルクをはじめとして諸科学者は、自らの言述・記述がおのれの所属する専門母系に則っており、科学主義を信奉している自覚が希薄である。自らが所属する科学への帰属意識は科学者への専門母系への固執を促し、日常生活

世界においては単一である土地の記述を拒ませる。結果的に土地に関する諸科学では、単純に分野の違いとはいえない性質の異なる記述が産出されてきた。その性質の違いとは、生活世界に直結した記述と科学的思弁による記述に大別され、さらに前者は直観的もしくは客体的であるか、後者は俯瞰的もしくは傍観的であるかに細分される。建築学と造園学の研究事例にもとづいてその違いを検討すれば、＜直観的・客体的生活世界＞と＜俯瞰的・傍観的思弁＞の記述のうちその内容を日常の実践上に直接反映できるのは、＜直観的生活世界＞の記述に限られてくる。しかもそれは近代以前の地誌のように、従来は科学的記述とみなされてこなかった、日常の実践への還元を可能とするとともに客観的妥当性をもつ記述であった。ここに旧来の土地に関する諸科学で述べられてきた客観性と、＜直観的生活世界＞の記述における客観的妥当性の相違が露見する。日常の実践における土地の記述を目指す上では、旧来の諸科学の研究態度の大幅な見直しが不可欠となる。

そもそも＜客体的生活世界＞と＜俯瞰的・傍観的思弁＞の記述が日常の実践に反映できないのは、諸科学において直接経験と観念の関係性があらかじめ断絶されてきたからであった。この断絶状態とは、いわば机上の空論と同義であり、日常の実践で有効性をもたない。それにも関わらず、これまで諸科学の研究成果は日常の実践において一定の説得力を有してきた。その矛盾が問われる。

庭石を据えたり庭木を手入れしたりするといった実践は、直接経験と理念の絶対的に不可逆的な関係を前提する。理念のすべては直接経験に依存しているが、理念は直接経験への可逆性を前提している。それゆえに、理念上の図像や計画が日常の実践を通じて実現できる可能性が開かれている。諸科学は、直接経験と理念の不可逆的な関係と、理念における直接経験への可逆性という先験的な位相を度外視してきた。また、直接経験と理念との関係には、直接的か副次的であるかによって遠近差が生じる。日常の実践においては、あらゆる出来事において無数の遠近差が生じており、場面ごとにその程度が異なることによって、いわば斑（むら）が生じている。この遠近差は理念であるため、実測などにより差異を明示することはできないため、わかりにくいものである。しかし直接経験と直結した理念と副次的な理念同士の構成が異質であるのは、日常の実践に反映すると矛盾が露見する。諸科学では、この直接経験と理念との関係の遠近差を同質視してきた。直接経験と理念との関係における不可逆性と可逆性の度外視、そして遠近差の同質視という二つの矛盾を抱えることによって、諸科学は、日常の実践において厳密性と信頼性を損ねてきた。そして諸科学の研究成果の説得力は、日常生活の実践との結びつきを擬似的に切り離しながら日常の生活世界への反映可能性を装った、永遠かつ普遍的な知に裏付けられてきたことになる。

日常の生活世界における土地の記述を行うにあたっては、自らが所属する科学への帰属意識から離脱し、直接経験と理念との関係にみられる信憑を哲学（現象学）に依拠して仮停止した上で、日常の実践における出来事の本質を導き出す必要がある。

第１部２章では、旧来の土地に関する諸科学のうち、庭に着目して、その古語、歴史資料、絵画を通じて歴史と今日との照合を行い、その本質的意味の枠組みを導き出す。

第２部では、前部までの検討にもとづいて、日常の生活世界における土地の記述を実践する。第１章では、歴史資料に基づいて庭の築造と継承における実践知を解明する。第２章では、庭の所有者と庭師らに対する聞き取りを通じて庭仕事の実践知を解明する。最後に第３章では、文化財の修理等の報告書の記述を通した庭仕事の実践知の解明を行う。

跋文では、日常の生活世界における実践知（プロネーシス）は、学（エピステーメー）の側から裏付けられることにより、ある時期の土地における特定の動機や要請を条件として、限定的な普遍性と一般性が導き出されることを示す。日常の実践上、複数の主観の間ではたえず直接経験と理念の往還関係が働いており、実践に関する出来事は発生し続けている。変転し続けているその出来事に普遍性や一般性を導き出すことは原理的にできない。その一方で、日常の実践の出来事が直接経験と理念の往還関係の働きを前提していること自体には、普遍性や一般性が認められる。つまり日常の実践の出来事に伴う実践知と、直接経験と理念の往還関係の働きといった信憑やそれを潜在的に支持する原信憑などを探求する学とは、表裏一体であるが位相が異なるため、一度に把握することはできない。したがって実践知の学とは、結果的に実践知と学の二つの位相から出発してその中間点に日常の実践の本質を導き出すための探求となり、実践知と学は相互に裏付け合う関係となる。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（ 今江　秀史 ）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
主 査	教授	村上　靖彦
副 査	教授	中川　敏
副 査	教授	檜垣　立哉
副 査	国立歴史民俗博物館元教授	玉井　哲雄

論文審査の結果の要旨

今江秀史氏の博士論文『庭の発生的現象学　土地をめぐる実践知の学の試論』は、2段組で261ページという大部の論述を通して「庭」という誰もが慣れ親しんだ事象に対して斬新かつ精密な視点を与える画期的な論考であるといえる。今江氏は京都市の庭を中心とした史跡の維持管理作業に長年従事してきた実践者であり、その視点から初めて記述が可能になった庭の全体的な姿を提示することに成功している。

本論はまず序章で自然科学の領域に属するとされている庭園学・造園学の先行研究に対して「実践そのものを記述できない」(p. 5)、「〔断片的な〕記述の総和が特定の土地の全容を意味しない」と根本的な批判を加えるところから本論文は始まる。その上で、哲学の一流派であり、近年医療実践の分析などに応用されるようになった「現象学」を庭を考察する方法論として用いることを提案する。

本論文はフッサールとメルロ＝ポンティについての正確な理解を元にして庭についての直接の経験から庭の学を再構築しようとする野心を持っている。なお現代では批判されているフッサールの科学批判に依拠している点について審査員から質問があったがこの点については今後の検討課題であるとの返答があった。

さらに「ニハ」の語源を探りそれが助詞の「に」と「は」と近縁であることを示すとともに、『御堂関白記』『一遍上人絵伝』などの絵巻物に描かれている庭とそこでの人々の行為を分析し、庭がもともと「そこにおいて行為が行われる場」のことを指し、行為とともに生成する動的な現象であることを分析する。

第１章では山県有朋が築造した無鄰菴（むりんあん）、細川護立（もりたつ）が築造した怡園（いえん）の築造をめぐる経緯を分析する。山県や細川本人が残した文書および友人や側近など周辺の人々が書き残した文書、当時の新聞、庭に残された石碑を丹念に分析することで、築造当時、政治家である当主が巻き込まれていた政治情勢との関係などの背景とともに、築造主がどのような意志を持って庭を築造したのかを明らかにしている。さらには山県が死後に京都市に保存を委託するにいたる経過までたどることで庭がどのように継承・保存されていくのか、制度的な側面から考察がなされている。

第２章は現在、京都市が管理する史跡において庭の維持修繕に当たる庭師をはじめとした実践者のもとでフィールドワークを行い、維持修繕の実践を通していかにして「庭」という現象がそのつど生成するのかを生き生きと描いている。まず１節では4人の実践者がどのように作業の際の隠語を用いるのかを丹念にひろい、隠語がどのような場面で使われ、庭師間のヒエラルキーと連動するのかという庭師の共同体を分析している。その結果すでに慣れ親しんだ実践者通しでは指示が暗黙のうちに通るためむしろ隠語さえも用いる必要がないことが明らかになってくる。第2節ではある庭を管理するチームをなす庭師たちにインタビューを行い分析している。日常的な恒常維持管理において庭師が季節に応じて変化する木々の植生や自然の荒廃、来訪者や寺社の行事などの要精に対応するとともに、庭師間で「みんな手が一緒」(p. 161)になるような共同性が明示的な教示がないなかで「見ながら見ながらずっと見ながら」というしかたで成り立っていく様子が示されている。庭は常に荒廃にさらされてお

り、「みんな手が一緒」になるような庭師の共同性が成立することで初めて、一つの庭が統一的な調和の取れた姿を維持し続けることができることが示される。第3節では、御所のような広大な庭と町家のような小さな庭のいてどのように木々の剪定の技術や意図が異なってくるのか、それにより整えられた庭の外観が変化するのかを「タナ」や「サラ」といった隠語の分析を交えながら明らかにしている。第4節では、ある固辞の庭の修理事業に携わった庭師と行政担当者（今江氏自身）との鼎談の分析を通して庭の修繕作業が実践者達によってどのように意志形成がされ、実践されていくのかを明らかにしている。行政担当者が庭とは「過程」であり「長い時間のなかで」整う時期と停滞する時期が「繰り返す」動的な現象(p. 177)として庭を捉えて庭師たちに積極的な庭の形成への参加を促す様子が明らかになる。こうすることで今までは指示を受けて受け身で作業するだけだった庭師たちが「能動的」な表現者へと変化してゆく(p. 182)。以上の部分は単なるフィールドワークにとどまらない、深い分析であるとして審査員から高い評価を受けた。

第3章では第2章で論じられた無鄰菴の恒常維持管理について、行政と業務を受託する造園会社とのあいだの交渉のプロセスとそこに働く意志の分析を第2節で行う。さらに無鄰菴において生じたき損をめぐって（今江氏が行政側の責任者として担当した）緊急修理の模様を庭の考古学的調査によって過去の修繕の系譜を辿り直すところから初めて修理を計画する。この場合、過去に作業をした庭師たちとの対話ということになり、歴史的な共同性の堆積のダイナミズムが明らかになってゆくことになる。

このようにして今江氏の博士論文は、しばしば歴史的な遺跡あるいは鑑賞物として固定した対象として扱われてきた庭が、実際には自然と文化にまたがるさまざまな次元においてつねに衰退と形成の過程をあゆんでいる「動的現象」であることを明らかにした。庭に集う人の営為、庭を作る人の意思、自然によるき損と鑑賞者の配慮と庭を維持する庭師の意志のからみあい、さらには修繕作業における過去との対話、これらの運動と行為のなかで庭はつねに立ち現れつつあるということが明らかにある。庭は空間芸術であるが、今江氏は作家の意図、自然の四季のリズム、庭師のリズム、修繕のリズムと歴史的な堆積、というようにむしろ時間芸術としてこれを捉えたという点でも画期的な視点を提示している。〈恒常的に変化し続ける多層の現象〉についての現象学であり、単なる発生的現象学ではなく、変化しつづける動的現象の現象学となっておりこの点はとくに評価できる。第2章、第3章については審査員の評価は共通して高かった。

哲学的には本論文は、現象学を新たな地平において活かす道筋を発見した労作であり、今後庭のみならずおそらくは都市のような複雑な事象の分析にも応用できる可能性を持っているであろう。また造園学において古典的な庭園についての統一的な考察が不足し、まして保存管理のプロセスについての考察が皆無であるなかで本論文の価値は高い。

そもそも現象学という方法論を庭の研究に持ち込んだことが前例のない学際的研究であったが、膨大な資料と先行研究の渉猟、さらにはフィールドワークをもとにした質的研究を経て見えてきた新たな庭の姿において本論文は極めて独創的なものとなっており、また哲学としての現象学にも新たな寄与をなす知見を持っていることから、博士人間科学の授与にふさわしいと審査された。

s